

会員カードの集計結果

学会活動の基礎資料作成の目的で、昨年天気14巻9号に紹介した会員カードによる会員実態調査の結果がまとまったので、その主要な点を報告する。なお、会員カードの回収率は54%にとどまったが、この結果は一応、学会の全会員の实態を表わすと考えた。(天気編集委員会)

1. 回答数：1098 (内訳A会員：566 B会員：497 不明35)、本年4月1日現在会員数2020 (内訳；A会員1250 B会員770) で回収率54%

ただしA会員；天気のみ購読会員、B会員：天気・集誌の購読会員

2. 会員年齢構成

会員を生年5年毎の階層に分けて年齢構成を表わすと図1のようになる。ただし、生命が1900年以前および1946年以後の会員は数が少ないので、それぞれ1階層として表わしてある。とくに注目を惹く点は、1920年代に著しいピークがあることであるが、これはむしろこの年代の会員を構成する気象庁職員の特異な年会構成が、そのまま会員数に現われた特殊な現象と見るべきであろう。したがって、1930年代の会員数が今後の気象学会の会員数を考える上の基礎になる数と思われる。そこで、今後新しい未開拓の分野が加わることを考えずに、現状を基礎にして20年後の会員構成を図形の上だけから、単

純に推定すると図2のようになる(60歳に達すると会員の4/5が退会するとの仮定が含まれている)。会員数は約400名の減少が見込まれる。

3. 会員の学歴構成

全体的に見て、現在、養成所(研究科・本科・専修科)卒業生が約半数を占め、かつA会員がとくに多い(図3)。これは図1の1920年代のピークの主要な構成

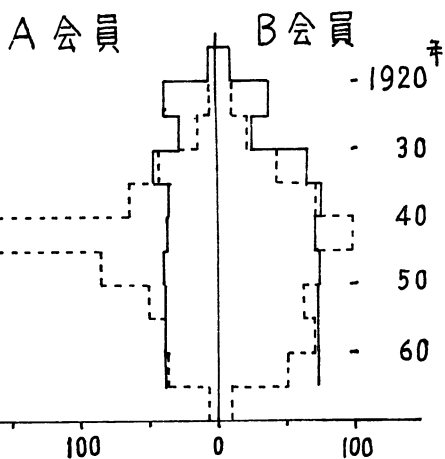


図2 20年後の会員の年齢構成(破線は現在の年齢構成)

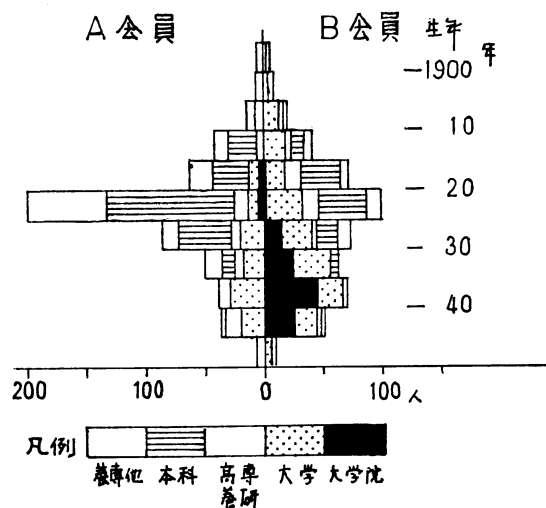


図1 会員の(学歴)年齢構成

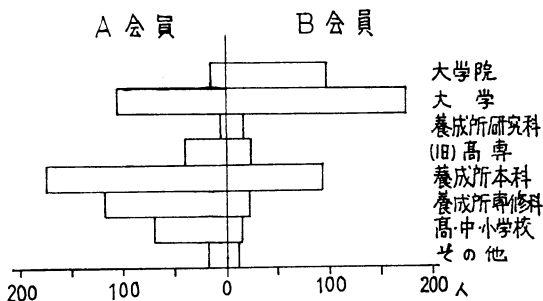


図3 会員の学歴構成

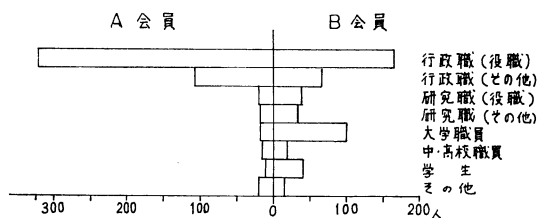


図 4 職種別会員構成

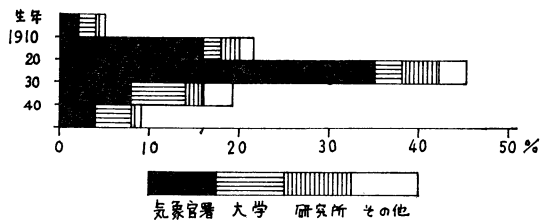


図 5 勤務先別会員構成

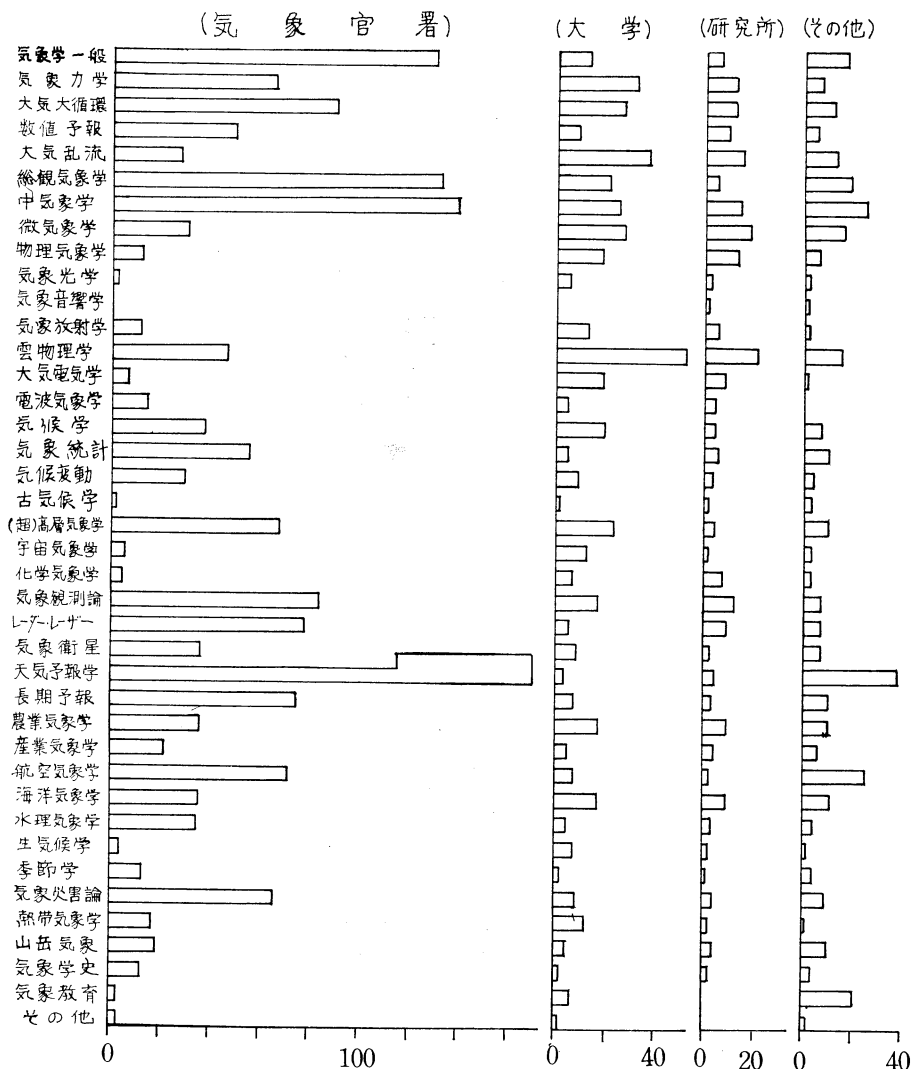


図 6 会員がとくに関心を抱いている気象学の分野

要素となっている。これは若年層の大学院出身者の占める割合の増加と相俟って、今後の気象学会の会員構成の変化を予測させる。

4. 会員の職種別(勤務先別)構成

図 4. 5に見られるように、現状では行政職とくに気象官署職員が数の上では圧倒的多数(66%)を占めてい

ることが分る。行政職ではとくに役職者の会員が多く、非役職の若年層の会員の少ないことが目立つ。また行政職の役職者にA会員が著しく多く（A会員：B会員≒2：1）、会員全体の過半数を占めている。

これに対して、研究所在職者が想像以上に少ないことが注目に値する。また職種別年齢構成について、とくに重要な点は、気象官署ばかりでなく研究所の会員数も若年層が著しく少ないことである。

なお、気象官署・大学・研究所以外の勤務先ではこれまでのところ気象協会など気象事業に関連ある機関団体の在職者がかなりの部分を占めているが、中学校・高等学校等の教員や他の産業界の在職会員数は少なく、今後の学会のあり方と関連して問題となる点であろう。

5. とくに関心を持つ気象学の分野

会員がとくに関心も持つ気象学の分野を、あらかじめ分類した40項目の中から各人が3項目ずつを選び記入した結果を、図5の勤務先の区分に従って集計した（図6）。多くの会員がとくに関心を抱く分野が、会員の勤務先（職種）によってかなり違うことが明らかになった。ちなみに上位3分野を挙げると、気象官署在職者では、天気予報学、中気象学（局地気象学）、総観気象学

であるのに対し、大学在職者では、雲物理学、大気乱流、気象力学、研究所在職者では、雲物理学、微気象学、大気乱流、その他の勤務先の会員では天気予報学、航空気象学、中気象学（微気象学）となっている。もちろん、各分野の絶対数自体はそれほど重要ではないが、このような大きな傾向の違いは、今後の学会運営、たとえば機関誌の編集などの上で考慮を要する一つの点であろう。

6. むすび

以上の結果を総合して今後の学会運営上の一、二の問題点を指摘したい。

1. 積極的に会員の増加を計ること。とくに気象官署の若年層や、気象学を専門とする大学以外の学校の教員の入会がさしあたり考えられよう。

2. 気象学会の目的は、学問の発展と気象技術の発展の二つが考えられる。気象学会会員のうち、気象庁職員にA会員が多いということは集誌が直接、技術の発展と結びつかないということを示唆しているのかもしれない。とすれば今後の気象技術の発展に気象学会がとるべき途を考えることも必要であろう。

〔書 評〕

雷雲への挑戦

グラナーニン著 川上 洸 訳

これは「新しいソビエトの文学」全6巻の中の第4巻の長篇小説なのであるが、題名から見ると雷雲の人工制御をテーマにしたものかとも見えるので、通読してみた。しかしそうではなくて、人工制御を目標にして雷雲の電気に関する、飛行機を使っての色々な実測を計画し実行する上での、困難を乗り越えながら進んで行く話がテーマになっている。政治形態がちがいで、行政形態がちがうので、研究所のやり方もちがう訳だが、描き出された研究者のいくつかのタイプにはそれぞれ日本の研究者であてはまるものがあるので興味深く読める。観測用の飛行機が偶然雷雲の中に突込み、翻ろうされた後パラシ

ュートで脱出するシーンの描写などは、気象技術者の参考にもなる。

あとがきによると作者は自然科学の学歴を持った人だということで、気象学的、電気工学的な記述も正確である。こういう批判的傾向の小説が出版され、それが外国で翻訳されているということは、とにかく記憶に値することであろう。本年5月中旬の国際大気電気会議の時にソ連から来日したシシュキンの話によると、沃化鉛をロケット砲で雷雲にうちこんで、オーバーシーディングをおこしてその人工制御をやっているという。

（勁草書房刊、B6判412ページ、価580円）（畠山久尚）